

環びわ湖大学・地域コンソーシアム

大学地域連携課題解決支援事業 2016 最終報告書

1. 滋賀医科大学×大津市・草津市	1
学生活動によるがん患者、がん患者家族を支援する活動、 がん予防への意識を高める活動	
2. 草津市×立命館大学	4
草津市内に残る歴史的建造物の実態調査	
3. 立命館大学×甲賀市	6
「あいの土山 道の駅」再生・地域活性化拠点形成計画	
4. 立命館大学×草津市	10
草津野菜の地産地消サポート、農業生産者および消費者の高齢化対策、 生産者と消費者がつながる環境づくり	
5. 滋賀短期大学×草津市	14
ゆるキャラ「たび丸」を活かした「カミッシュ」による草津市の国際的 PR の試み	
6. 東近江市×龍谷大学	16
未来につながる「儲かる農業経営」	
7. 東近江市×びわこ学院大学	20
東近江市における空家の調査とその活用に向けての提案と実践	
8. 彦根市×滋賀県立大学	24
学生と市民が主体で取り組むナガエツルノゲイトウ等の駆除大作戦	
9. 長浜バイオ大学×長浜市	26
理系人材を育てる“サイエンスカフェ”の開催	
10. 大津市×龍谷大学	30
びわ湖大津の魅力発信！ステキな動画製作事業	

No. 1

プロジェクト名（活動テーマ）： 学生活動によるがん患者、がん患者家族を支援する活動、がん予防への意識を高める活動	
提案者	：滋賀医科大学 学長 塩田 浩平
自治体担当者	：大津市保健所健康推進課 酒井、草津市健康増進課 森田
連携大学担当者	：滋賀医科大学 医学部医学科 6 年 西 明博

1. 取組み体制

主催：リレー・フォー・ライフ・ジャパン 滋賀医科大学実行委員会

（滋賀医科大学及び滋賀県立大学の医学生・看護学生 計 27 名から成る組織）

公益財団法人 日本対がん協会

共催：国立大学法人 滋賀医科大学、一般社団法人 環びわ湖大学・地域コンソーシアム

後援：滋賀県、大津市、草津市、その他自治体、教育委員会、病院、医師会、商工会など多数

2. 背景・目的

現在、日本人の 2 人に 1 人 ががんにかかる時代である。滋賀県でも、がんは死因の第 1 位であり、年間 3,000 人以上の県民ががんで亡くなっており、がんは全ての県民の課題である。

リレー・フォー・ライフ（以下、RFL）は、がんと向き合い、がんには負けない社会を作るためのチャリティー活動で、世界各地で開催されている。年間を通じて募金活動・啓発活動を行い、その集大成として 2 日間夜通しのリレーイベントを行う。これらの活動を通して がん患者とその家族を支援し、社会のがんに対する意識を高める ことを目的とする。なお、学生による RFL 開催は 日本初 の試みで、若い世代に対する がん教育・社会教育 の場としても期待される。

3. 活動内容

○県内各地での募金・啓発活動

大津、彦根、長浜など各地のイベントに出展し、募金活動やがんの啓発活動を行った。



＜彦根ふれあいまつりでのブース出展＞

○様々なメディアでの広報活動

新聞、ラジオ、テレビなど様々なメディアで広報活動を行った。



＜新聞各紙への掲載＞

○後援・協賛依頼

学生が県内を駆け回り、48 の自治体・団体から後援を、47 の企業・団体から協賛を取り付けた。



＜三日月知事への臨席依頼＞



＜嘉田前知事への協力依頼＞

○リレーイベント開催

活動の集大成として 10 月 8 日、9 日に夜通しのリレーイベントを開催した。主な企画内容は、

①24 時間続くリレーウォーク

がん患者や家族、医療従事者、学生などがチームを作り、夜通しトラックを歩き続けた。

②がん啓発セミナー

医師や患者による講演会を行い、がん医療の展望や検診の重要性について発信した。

③がん検診

実際に会場で子宮頸がん、前立腺がん、ピロリ菌の検診を実施した。

④ルミナリエセレモニー

メッセージを書いた灯籠を並べ、がんで亡くなった方を追悼した。



＜リレーウォーク＞



＜医師による講演会＞



＜会場での検診＞



＜灯籠のセレモニー＞

4. 活動成果と次年度の計画（課題）

【参加・共催団体数】約 80 団体

【リレーイベント参加者数】約 800 名

【当日検診受診者数】222 名

【参加したがん患者の声】「学生さん達がフラッグをつながながら元気に歩いていると、こちら
も元気をもらえました」、「私達のところに希望とやさしさを灯してくれて本当にありがとうございました」

【実行委員の声】「がん患者の精神的、社会的なつらさを知れた」、「実際に患者さんの声を聞くことで、自分がどんな医療者になりたいか見えてきた」、「がん医療に関わる医療・福祉・行政の方々の仕事ぶりを知れた」、「外部の人々との交渉スキルを学んだ」

【次年度の計画】

この取り組み内容を踏まえつつ、滋賀県内の学生で実行委員会を組織し、学生主導のリレー・フォー・ライフ・ジャパン 2017 を本年 10 月 8 日（日）、9 日（月・祝）に開催することを決定している。

会場は、滋賀医科大学キャンパス内で行い、夜越えの交代制リレー、大津市及び草津市と協働して、若い世代のがん検診の受診率の向上を訴えるなど、滋賀県全体でがん対策の広報活動組織のひとつとして定着を図り、併せて、継続的な学生活動として全県的な展開を図るため具体的な活動内容を精査し、課題等を整理し本コンソーシアム構成大学の持ち回り開催や多くの大学を巻き込んで開催することとしたい。

プロジェクト名（活動テーマ）：草津市内に残る歴史的建造物の実態調査	
提案者	：草津市教育委員会 文化財保護課 課長 藤居朗
自治体担当者	：草津市教育委員会 文化財保護課 課長 藤居朗
連携大学担当者	：立命館大学理工学部 建築都市デザイン学科 及川清昭教授 青柳憲昌講師

1. 取組み体制

以下の三団体で取り組んでいる。

- ・草津市教育委員会文化財保護課 参事 藤居朗
- ・立命館大学理工学部建築都市デザイン学科 及川教授および都市空間デザイン研究室
- ・立命館大学理工学部建築都市デザイン学科 青柳講師および建築史研究室

2. 背景・目的

本プロジェクトの対象地である草津市常盤地区は古くから開けた地域であり、交通の要衝に立地していた。長い間集落の核となってきた神社の中には、古代・中世に創建が遡るものが多く、室町時代に流行した風流踊りに起源をもつ「サンヤレ踊り」は、今日の神社祭礼においても、よく継承されている。さらに、同地区には印岐志呂神社本殿、三大神社本殿、若宮、吉田家住宅など、歴史的価値の高い建造物も多く現存している。しかし、近年の開発により維持が困難になっている歴史的建造物や集落もある。本プロジェクトでは、それらの保護対策やこれからの草津市のまちづくりのための基礎資料を作成することを目的としている。

3. 活動内容

○2014 年度、2015 年度の取り組み

- ・印岐志呂神社・三大神社本殿・若宮の実測調査、聞き取り調査、年輪年代調査
- ・吉田家住宅・保田家住宅の実測調査、聞き取り調査
- ・滋賀県県民情報室、草津宿街道交流館での歴史的文書、地籍図の閲覧
- ・日本建築学会での研究発表（芦浦村の集落に関する論文発表）

○2016 年度の取り組み

①現地調査（実測調査・聞き取り調査など）

7月7日、17～18日、7月23～24日、9月9～11日、10月27日、11月17日

滋賀県内の前室付三間社流造神社本殿の調査

滋賀県内に立地する三大神社・印岐志呂神社と同形式の神社本殿の外観調査を行った。全73社の神社との比較から印岐志呂神社・三大神社の特徴を分析し、価値付けを行う。



類例調査

10月3日（月） 立木神社本殿実測調査・聞き取り調査

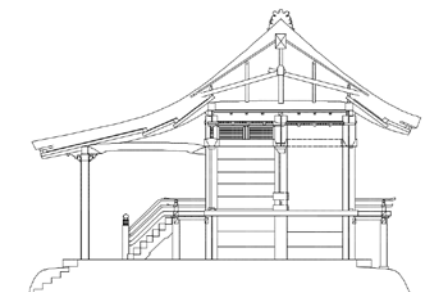
- ・立木神社本殿の実測調査を行い、その後、立面図・平面図・断面図（下図）を作成。
- ・宮司さんへの聞き取りから、建物の使われ方や改修経緯などを確認した。
- ・文献資料も参考にしながら価値付けを行い、今後どうしていくかを考える。



立木神社の実測



立木神社



立木神社断面図

②文献調査・学術調査・学術発表

8月25日（日）

日本建築学会での研究発表

論文「三大神社本殿の建設年と意匠的特徴」を発表。祭礼と神社の関係、細部に関してのご指摘や質問を受けることができ、今後の研究の参考になった。



学会発表の様子

5月13日、6月9日、11日、9月7日、28日、10月8日、23日、29日、11月18日、20日

滋賀県立図書館での古文書調査

滋賀県立図書館にある草津市史採集文書のうち、三大神社の形式、祭礼などに関する資料や常盤地区の集落の変化などに関する古文書を用いて分析を行った。

草津市常盤地区の近世における集落の都市的变化や条里地割の崩壊についての論文作成

滋賀県立図書館にある草津市域の古文書や草津宿街道交流館所蔵の地籍図などを用いて、江戸時代における常盤地区の集落の都市的变化を明らかにし、学術論文を作成した。

4. 成果と課題、今後の取り組み

今年度はこれまでの調査・研究をさらに深めるとともに新たな建造物に関しても調査を行い、今後の保護計画や整備計画の材料を増やすことができた。

これまでの3年間の調査・研究の結果をまとめ、調査を行った建造物については文化財（市指定）の指定を目標として建造物特徴や歴史的価値をより詳細に明らかにしたい。また、草津市内のその他の建造物についても現状調査を行っていく予定である。学術調査で得られた知見ももとにして、文化財の保護対策や今後の整備に関する全体的方針を策定し、将来は文化財を活かしたまちづくりを行っていきたい。

No. 3

プロジェクト名（活動テーマ）：「あいの土山 道の駅」再生・地域活性化拠点形成計画	
提案者	：立命館大学経済学部 金井ゼミ 代表 客員教授 金井萬造
自治体担当者	：甲賀市 総合政策部 政策推進室 主事 折田みゆき
大学担当者	：立命館大学経済学部 客員教授 金井萬造

1. 取組み体制：

検討対象の道の駅施設は甲賀市の国道2号線の東の玄関口に位置し三重県との県境にあります。1993年の全国で最初に整備されて23年を経過しています。この間、2008年に開通した第2名神高速道路により交通量が分散して道の駅前を利用する交通量が減少し、時代的变化である人口減少・少子高齢化の進行、商業・流通システムの変化の影響を受けて対応が求められています。さらに、最近の政策的取組みとして地域再生・創造を目指す地域の拠点としての利活用が課題です。立命館大学経済学部・金井ゼミ（大学院生・藤田太裕）と甲賀市の関係部局（総合政策部・産業経済部・教育委員会・観光協会）の関係者及び道の駅・関係者が検討チームを組み検討を行っています。

2. 背景・目的：

設立当初は国道1号線の立地を活かした道路利用者・土山宿の立ち寄り拠点としてサービスを提供する経営を行ってきたが時代の変化と地域再生の課題に応えた「行きたくなる」地域づくりの拠点としての機能発揮が求められてきています。全国の道の駅の整備と動向から新たな時代・地域・社会ニーズに応えた対応として東日本大震災を経験して災害対応の防災拠点としての役割や公共性を重視した福祉・防災、観光、文化活動、地域経済などの様々の分野での機能発揮が期待されてきています。

土山・道の駅の再生・地域活性化に向けての取組みを通して新たな機能を含めた可能性の検討とそのための態勢づくり・組織的対応のあり方と実践を通じた活動の計画づくりを主な目的にしています。

3. 活動内容：

2016年7月から活動を開始して、2017年2月末段階までの取組みをまとめます。

（1）「あいの土山 道の駅」の利用実態と問題点・課題の抽出

一日の時間別利用、ウィークディと週末の利用、利用者の目的、客層の分析、季節変動等について、現地観察を中心にして定性的に把握した。

2008年以降、減少していた利用者が徐々に戻りつつある質的变化も見られます。それは地域ブランドの製品の供給や休憩・空間のゆとり・周辺の自然環境・ネットワーク上での利便性等からですが積極的な取組みや関連イベントの開催や連携した取組みの企画や施設と空間を活かした賑わいづくりが求められています。問題はそれらの取組みの主体形成

です。地域での集まりやすい・交通条件・駐車場面積からも今後の取組み方について具体化していきたい。

（２）関係者との意見交換・研究会（道の駅・関係者）の実施とアイデアの整理

当初の道の駅設置者・甲賀市の関係部局の関係者との個別ヒアリング・道の駅関係者との研究会等を通しての意見の聴取と甲賀市観光ビジョン策定担当事務局ヒアリングを実施しました。

当初の基地の駅設置者の想いをお聞きし、道の駅の駅長さんや従業員の皆さんとの研究会でご意見をお聞きしました。色々な工夫の取組みが開始されて地元の食材を使った食文化の提供や地域ブランド商品コーナーの配置や構成は訪問者に好評を得ています。

さらに、先進事例からの教訓を生かした取組みが求められています。

（３）道の駅の先進地域の調査と関係者及び地域再生に取り組んでいる関係者のヒアリングを実施し、土山・道の駅の取組みの教訓を引き出しました。取組み事例としては、石川県七尾市・食祭市場と御祓川大学関係、羽咋市・神子原直売所、岩手県遠野市・風の丘、等について検討しました。

七尾市の食祭市場や御祓川大学の調査・関係者のヒアリング・資料収集を行いました。

３人での地域調査で意見交換をしながら調査を実施しました。道の駅の施設内または空間を利用して賑わい・交流・体験・意見交換・共同の取組み等ダイナミックな場の盛り上げが重要なことが教訓です。地域を愛する人材の育成や地元に着住する人材づくりやリピーターの増加から地元定住の人材づくりも課題です。遠野市・風の丘は全国成功例として多くの教訓を得ることができました。出品者の顔が見える出品スペース（商品空間）でお互いが新鮮でおいしさを競争できる取組みによって道の駅の間を盛り上げている。羽咋市・神子原直売所では地元の農家の主婦が農産物を加工して付加価値を付けて販売に取り組んでいた。

（４）既存文献・政策等から「道の駅」の新たな付加機能について検討しました。

道路利用者に対するサービス機能から地域産業振興機能、地域防災機能（特に東日本大震災後）、地域再生・地域活性化機能等の公共施設機能としての「まちづくりの駅」機能の発揮の取組み内容が検討の課題です。

国土交通省は２０１６年に新たに「重点道の駅」３８か所を選定しました。これは道路対応のサービス機能に加えて地域再生・創造拠点として道の駅の位置づけです。狙いは地域の活性化です。これらの取り組みを推進していくためには地元の関係組織が連携して取り組む態勢づくりと実践対応が必要です。これらの可能性については新たな検討課題として取り組んでいく計画です。

（５）地域再生・創造の核としての拠点形成のコンセプトづくり

これまでの取組みからは従来からの整備機能である休憩・情報発信・地域連携（食事・物産）の機能からの新たな展開の取組みは開始されていません。

防災・福祉・観光・文化活動・地域経済・体験交流学習等の機能の内で従来の整備機能を

活用した観光機能や文化活動や体験交流学習機能については工夫しながら取組みの拡大は容易です。防災・福祉・地域経済等の機能については関係部局での位置づけとの整合性を図り具体化が望ましいと思われます。観光面では道の駅を拠点にした観光コースと実践、文化活動では施設と空間を使ったイベント会場としての活用、体験交流学習はテーマを設定して関係団体が中心になった取組みの具体化が考えられます。

（６）「道の駅」の運営・経営・サービスの改善の検討

現状の道の駅の経営は食事の工夫、地域ブランドを活かした商品の取組み、トイレ施設の整備、休憩機能の充実、情報面での工夫等が取り組まれていて、交通量の減少下でも経営的に検討している。しかし、今後の更なる人口減少・少子高齢化に対応していくためには地域再生の役割を発揮していく取組みが望まれています。

訪問者（観光客）との対面での道の駅・商品の理解や興味に積極的に対応する販売対応や道の駅のブランドを強調して商品展示や出品者との出会いと会話の演出とうでより親近感を強めるもてなしの工夫が求められる。駐車場空間を利用してイベントの企画や他の取組みと連携した取組みが求められる。

（７）道の駅と周辺地域の資源を連携した新たな取組みとしての企画と社会実験の取組み

あいの土山 道の駅の周辺には多くの地域の資源が点在していて、道の駅を核とした着地型観光の事業について、ウォーキングツアーを実施に参加者等から意見を聴取した。地域資源が豊富にあるが観光案内コースの具体的設定と実践からモデルコースや季節ごとのコースの設定や語り部・ガイドの養成や受け入れ態勢・広報対応の工夫が求められる。

（８）「行きたくなる」・「地域が元気になる」・「地域創造に貢献する」拠点づくり

「寄りたくなる」取組みから「行きたくなるリピーターとしての道の駅」への転換、「地域商品の発信や周辺地域の拠点・関係者が連携し集まっている交流・体験の空間・施設としての利活用への転換、「元気をつくる・生み出す・共感する拠点」としての利活用、活動を通して地域再生・創造に貢献する取組みは今後の課題です。先進事例から教訓を整理します。

七尾市・食祭市場（道の駅）では地域の方の企画したイベントの開催、市内の各種団体の事業の企画と場・空間の利用、国際交流の場、学習の場、交流体験の場、家族の取組み等賑わいづくりや地域の人々の集まる拠点としての利用がされています。羽咋市・神子原直売所では買い物客と地元食材を加工した農家の主婦層との意見交換・交流の場となり販売量の拡大に貢献している。

遠野市・風の丘（道の駅）では道路網の整備が変更になり集客対応の強化に取り組んでいる。地域の生活に直結した展開や季節対応や地域ブランド商品や出展者が元気になると陸組みを強化しています。顔が見える対応として出品空間の顔写真や出品農家のコメント等消費者と生産者の距離をできるだけ感じさせない対応を取っています。

（９）地域再生・活性化の取組み方法の検討

従来の全国の実例から地域活性化力の構成要素は明らかになってきています

地域活性化力式＝危機感（情熱）×人・組織×地域資源×市場対応

地域活性化事業を支援する取組みとして、

事業支援態勢力式＝事業資金×制度活用×財政（税制）×支援者

このような視点から土山・道の駅の今後のあり方を検討しました。

土山・道の駅対応で検討すると、道の駅を盛り上げていく地元の関係者がもっと情熱を持って取り組む態勢づくりや道の駅の応援組織と立ち上げと活動が必要と思われます。その組織が企画・事業をつくり活動を強化していくことが大切です。何よりも地域資源の発掘の取組みを実施して地域商品の発信と広報の取組みを強化して来訪者の集客を強化していく。支援する取組みも重要です。支援者を組織するイベントの開催や観光協会・ボランティアガイドの組織の協力を得て道の駅を核とする魅力事業の企画・実施によって地域の関係者が楽しみながら支援の輪が広がっていくことを望みたい。

4. 活動成果と次年度の計画（課題）

（1）活動成果

- 「道の駅」機能のあり方を事例検討と現状・地域課題から整理できました。
- 「道の駅」の運営にあたって従来の運営・経営体制に加えて周辺地域の核としての地域の自立を目指した地域運営・経営組織づくりの必要性が明らかになりました。
- 「道の駅」の振興にあたって、地域経済の循環的対応が大きな役割を果たす取組みが大切であることが明確になってきた。
- 「道の駅」の賑わいづくりには道路利用者と地元の関係者の協力が必要です。
- 「道の駅」を拠点にしたモデル観光コースの設定と社会実験をして教訓を得た。さらに次に継続して進めていきたい。
- 年間のイベント企画との連携の対応について課題が明確になりました。

（2）次年度の計画（課題）

- 「道の駅」の集客の促進策については先進事例を調査して土山・道の駅の参考になる検討を継続していく。
- 着地型観光の手法を適応して季節・イベント対応のモデルコース・事業展開について検討していく。
- 「道の駅」の出品商品の付加価値を高めるために地域個性・ブランド性の展開や地元の生活文化・食文化の検討をしていく。
- 「道の駅」の賑わいづくりと地域の取組み・行祭事との連携を強める取組みを推進していく。
- 「道の駅」の支援態勢のあり方について既存の体制と併せて検討していく。
- 「道の駅」の土山版 DMO（観光地経営組織）のあり方について参考事例の検討を踏まえて検討し、提案していく。

プロジェクト名（活動テーマ）：草津野菜の地産地消サポート、農業生産者および消費者の高齢化対策、生産者と消費者がつながる環境づくり	
提案者	：立命館大学サービスラーニングセンター センター長 高嶋正晴
自治体担当者	：草津市環境経済部農林水産課特産振興グループ 主任 湯浅圭太
大学担当者	：立命館大学共通教育推進機構 講師 宮下聖史 立命館大学サービスラーニングセンター 主事 高橋あゆみ

1. 取組み体制：

立命館大学びわこ・くさつキャンパス（BKC）の学生4名が、農業パートとマーケティングパートの2部門に分かれて事業を実施した。農業合宿や農場での作業についてはJA草津市のサポートを受けた。草津市農林水産課は事業実施に関わる助言を、大学担当者の宮下は学生への指導・助言を行い、高橋が経費の管理等の事務業務を担当した。agRits（agriculture＋Ritsumeikan Univ.）と名付けられた学生チームの氏名と担当は右の表の通りである。

農業パート	長田 拓馬（生命科学部3回生）
	清水 知紗子（経済学部4回生）
マーケティングパート	上田 隼也（生命科学部3回生）
	加藤 徹也（生命科学部3回生）

平成28年度活動メンバー一覧

2. 背景・目的：

BKCが立地する滋賀県草津市は、近畿圏で有数の葉物野菜の生産地である。しかしながら、平成27年度事業で明らかとなったのは、立命館大学学生の草津野菜の認知度は極めて低いということである。同様の傾向は、広く草津市民にも当てはまることが予想される。その原因の1つとして、農業の営まれている地域は草津市のなかでも琵琶湖畔の一部に限られており、産業別就業人口の比率で見ると、第1次産業従事者は全就業者の1.5%に過ぎない（平成22年国勢調査）。そこで本事業では、草津野菜の魅力を発掘し、それらの魅力を広く市民に向けて発信していくことを目的とした。実際の活動においては、農業パートとマーケティングパートに分かれ、活動を行った。



ガイダンスの様子

3. 活動内容：

▽農業パート

【主な活動】

- ・2泊3日の農家合宿(8月6～8日)
- ・SOFIX 技術を用いたほうれん草と小松菜の栽培

【詳細】

約 2,000 棟のビニルハウスを有する近畿圏最大の施設野菜産地である

実際に農業をやってみた(耕運から播種まで)



ほうれん草と小松菜の栽培の様子（現地報告会資料より）

草津市北山田地区にて農家合宿を行った。受け入れ農家での栽培は主にみず菜、メロンなどである。年間を通して安定した生産を続け、近畿圏に向けて出荷している。合宿では水菜の生産の一連の流れを経験することができた。また、農家の方から、農業に関わる地域課題や農業政策の問題点、加えて農業に対する思いなどを聞くことができた。

この経験を踏まえて、自ら野菜の栽培にも挑戦した。JA 草津市の協力のもと実験農場をお借りし、立命館大学生命科学部久保幹教授の協力を得ながら、SOFIX 技術を活用して無農薬のほうれん草と小松菜を栽培した。SOFIX とは、土壌中の微生物量や窒素循環、リン循環を数値的に表すことを可能とした土壌診断技術である。ただし結論を述べると、今回無農薬の野菜を栽培することができなかった。農地に元から含まれていた残留農薬が原因である。

▽マーケティングパート

【主な活動】

- ・草津のお土産作りコンテスト入賞（ほうれん草のキッシュを作成）
- ・農業和歌コンテスト応募、学生団体総選挙応募
- ・みなくさま祭り(12月4日)の企画

【詳細】

草津野菜のブランド化を試みた。草津野菜の「魅力を発信する」ことに焦点をあて、市民団体が主催する「草津お土産作りコンテスト」に応募したり、以下に示すようないくつかのメディアに取り上げられることによって、草津野菜の PR に寄与することができた。また、広く草津市民に直接、SOFIX 技術を使って栽培した野菜を PR するために、12月4日に開催されたみなくさま祭りに出店した。

▽みなくさままつり

みなくさままつりでは、SOFIX 技術を用いてつくったトマトと一般のトマトを用意し一般の方に試食を行った（A・B だけしか情報がわからないようにしてブラントテストを実施）。100 名に試食テストを行った結果、76 名がソフィックストマト（B）の方が美味しいと回答する結果となり、ソフィックス技術を用いた野菜が一般の農薬を用いて作る野菜よりもより美味しく、そして安全に栽培できる事が証明できた。



みなくさままつりでの活動の様子

▽現地報告会

これらの活動の成果を受けて、お世話になった関係各位を招いた現地報告会を 1 月 10 日、JA 草津市本店にて行った。着実に草津野菜の魅力を知り、地域とのつながりを形成することができていることが評価されたが、SNS を使った PR やより市民に見えやすい形で活動を日常化させることなどが課題として出された。



現地報告会の様子

4. 活動成果と次年度の計画（課題）

▽学びと成長

活動報告会にあたって、学生がまとめた学びと成長は次の通りである。

- ・個人ではなくチームで活動していく時は自分の意思や希望よりもチーム全体としてベストな結果が出る行動や意思決定をするべき。
- ・想定外のアクシデントが発生しても柔軟に対応できるようにあらゆる不具合の可能性を考慮してプロジェクトを進めるべき。
- ・チーム内部はもちろん、外部も含めて積極的な会話から良いアイデアが生まれるため、直接顔を合わせて話し合う場を定期的に設けるべき。

▽活動の評価とメディアへの掲載

以上の活動を通じて、草津野菜の魅力向上と PR に取り組んできたところであるが、これらの成果はいくつかの受賞やメディアへの掲載にもつながった。具体的には以下の通りであり、これもまた今年度の成果である。

1) 「帰省で自慢！草津のお土産を作ろう」（主催：草津の元気と自慢土産づくり隊）でのレシピ部門での入賞

2) 「環びわ湖大学地域交流フェスタ 2016」（主催：環びわ湖大学・地域コンソーシアム）での活動奨励賞受賞

3) 「キラリと輝く学生+R な人」立命館大学ホームページ

http://www.ritsumeikan.ac.jp/features/r_na_hito/entry/?post=71

4) 日本農業新聞、平成 29 年 1 月 24 日



入賞・受賞の賞状とともに

▽次年度の計画（課題）

平成 28 年度の事業を契機として、agRits は平成 29 年度の本事業とは切り分けて引き続き活動することになっている。今年度の失敗を活かして SOFIX 技術を活用した無農薬野菜を作ることである。

これらの取り組みと連携しながら本事業としては、引き続き以下のような内容で生産者・生産地での地域活動や市民との交流、草津野菜の情報発信を進めていく。

- ・農家合宿や生産者への聞き取りを通じて、草津野菜の特性や生産者の生活課題や生産地の地域課題を把握する。
- ・道の駅などで定期的にイベントを開催し、賑わいを創出する。加えて、秋に開催予定のみなくさまつりへの出店や SNS を通じた情報発信によって草津野菜を PR する。



プロジェクト名（活動テーマ）： ゆるキャラ「たび丸」を活かした「カミッシュ」による草津市の国際的PRの試み	
提案者	：滋賀短期大学 ビジネスコミュニケーション学科 学科長 小山内 幸治 准教授 江見 和明 特任教授 清水たま子
自治体担当者	：草津市総合政策部企画調整課 主任 高橋 佑輔
大学担当者	：滋賀短期大学 総務課長心得 中村 治重

1. 取組み体制：

草津市と連携して1年間の事業とし、下記のように取り組んだ。

- (1) 「たび丸」のPR状況の把握と課題確認等のために学生、教員、草津市等による合同ミーティングを計3回実施した。
- (2) 「たび丸」を主人公にした「カミッシュ」を作成して、十分なものではなかったが、平成27年12月3日に行われた「大学地域交流フェスタ2016」で発表した。
- (3) 小山たかこ氏指導の下で、カミッシュサークルの学生7名で「カミッシュ」あるいは、「物語」を制作して、口演を試みた。

2. 背景・目的：

カミッシュとは、「紙芝居」とEnglishを合わせた造語である。2020年の東京オリンピックに向けて、外国人観光客が増加すると思われるので、そのときに滋賀県を楽しく簡単に紹介するツールとして、簡単英語の紙芝居をつくるという取り組みを2015年から始めた。地域の特産物の紹介等々のカミッシュを制作しつつも、日の目を見るところまでは達しなかった。そのようなところに、草津市から「たび丸」を活用して、草津市のPRはできないかという話がきた。少々、大上段に構えた感がなきにしもあらずだが、草津市の国際的PRの試みというテーマを掲げた。

「たび丸」を主人公にして、草津市内の名所旧跡・特産品・文化等々を際立たせ草津のPRとなる「カミッシュ」を制作して口演をすることになったのである。市外の大学であることを活かした提案をすることで、草津市のみならず、滋賀県全体の魅力の再発見につなげることを目標とした。

2015年開始から、学生に対する活動の目的として次の4点を挙げてきた。次第に身につくことを期待しつつ進めてきた。

- ①材料を収集することで郷土を深く知ることになり愛着が生まれる
- ②英語学習のモチベーションを高め、簡単な英語に慣れる
- ③コミュニケーション能力が育成される
- ④市民活動をする人、あるいは行政に携わる人たちとの制作を通じて協調性が生まれる

3. 活動内容：

●5月30日(月)

小山たか子氏、草津市総合政策部 企画調整課 主任 高橋佑輔氏ほか2名、カミッシュサークル学生 7 名によるミーティング実施。本テーマに基づいた活動方針と計画について話し合う。12月3日の中間報告まで計3回実施。

●8月31日(水)

カミッシュサークル学生と小山氏のアイデアを持ち寄り、検討を行い、ゆるキャラ「たび丸」同様に可愛らしく、初心者でも気軽に話せる英語、いわばハートで話せる英語に馴染んで、外国の方々に草津市のPRができるようになるという方向性で取り組むことを決定した。

●材料収集活動として、近隣の商店街に伺い地元の歴史等々を知り、学生たちの関心が深まる。9月5日他随時。

●11月1日(火)、

まずは、幼児に向けた「カミッシュ」制作に取りかかる。

●11月5日(土)

滋賀短期大学純美禮祭で、保育園児を前にしてカミッシュの口演を試みる。

●11月9日(水)、11月16日(水)

カミッシュサークル学生と小山たか子氏が、本テーマに基づいた活動の取り組みを続ける。「カミッシュ」制作、口演練習を行う。

●11月22日(火)

カミッシュサークル学生と顧問がカミッシュスタジオに出向き、小道具づくり、動画撮影等を行う。

▼当テーマとは別に依頼を受け、口演に出向いた記録3件。



5月21日(土) 堅田老人センターへ



8月7日(日) 草津すまいる I 号館へ



8月20日(土) 大津市竜が丘レストパークの夏祭りに参加

4. 活動成果と次年度の計画(課題)

カミッシュサークルが本年度の計画を達成したうえに、草津市のゆるキャラ「たび丸」を活かした活動が曲がりなりにもできたというのは、遅々とした歩みからは予想外の成果だったと考えている。今後は、草津市の名所・旧跡の案内ができるよう、徐々に内容を深めていく。当初に、大きな目標を掲げているが、少しずつであっても、そこに到達すべく活動を推進していく予定である。

プロジェクト名（活動テーマ）：未来につながる「儲かる農業経営」	
提案者	：学生（角谷穂乃香、堀部祐輝、稲田遥香、堀添泰葉）、淡路教授、愛東地区地域おこし協力隊等 4 名）
自治体担当者	：東近江市愛東支所 副支所長 奥村清和
大学担当者	：龍谷大学 農学部 食料農業システム学科 教授 淡路和則

1. 取組み体制

次のメンバーで、今回の事業を進めました。平成 29 年度には、このメンバーにより儲かる農業経営研究会が組織されます。

（メンバー）

愛の田園振興公社	湖東農業協同組合
NPO 法人愛のまちエコ倶楽部	愛東地区地域おこし協力隊
東近江農村農業振興事務所	東近江市農業水産課
東近江市愛東支所	地元農家及び関係者

（助言、指導）

龍谷大学農学部食料農業システム学科 淡路教授及び学生

2. 背景・目的

東近江市では、近畿最大の耕地面積を誇る一大穀倉地帯であり、愛知川等によって育まれた肥沃な農地において、近江米をはじめ、大豆、麦、野菜、果樹、肉用牛、花きなど質の高い農産生産が展開されてきました。

一方、愛東地区でも旧愛東町時代から、農業を町の基幹産業として位置付け、農業の近代化、合理化を図るべく諸事業を実施し、全国にも注目される農業による町づくりを進められてきました。

しかしながら、農業・農村をめぐる社会的・経済的諸情勢が急激に変化しており、農業・農村の将来が見通せない状況になってきています。

こうした状況を踏まえ、新たな時代に対応した農業・農村を確立していくために、平成 28 年 7 月に東近江市農業基本計画が策定され、その中で『風土を生かし、みんなで育て未来につなぐ 豊かな東近江市の農』を目指し儲かる農業経営を推進されています。

そこで、今回の大学との連携事業では、学生が愛東地区で農業の生産から販売までの過程を体験し、農業者、加工・販売関係者、消費者と交流をもつことによって、この地区における農業の持続・発展と活力ある農村が実現する仕組み、手立て、アイディアを提案し、地域の関係者と一緒にこれからの農業・農村の将来を考え、地域全体が豊かに

なる「儲かる農業」を実現していきます。

また、この事業を通じて龍谷大学と東近江市との持続的な連携を構築します。

3. 活動内容

(1) 龍谷大学の学生による地域実態調査等の実施

① 愛東農業を知るための体験学習への参加

平成 28 年 8 月 24 日から 26 日の 2 泊 3 日で、梨の収穫、選果、愛東直売館での販売を学生 4 名等で体験しました。はじめに地域農業の概要のレクチャーを受けて地域農業の特徴を把握した後、梨農園に行き、梨の栽培概要を学び、収穫作業を行いました。翌日、選果場でナシの規格について説明を受け、施設導入の意義を学んだ後、選果作業を行いました。その後、直売館で販売の現場を見学し、来客の買い物行動の観察を行い、愛東の梨の訴求について議論し、POP を作成しました。最終日に、実際に店頭に立ち顧客対応をすると同時に、品出しや発送作業を行いました。

この間、地域おこし協力隊から愛東農業の魅力と発展課題についての話を聞き、意見交換を行いました。

② 農業イベント「大秋穫祭」への参加

毎年、秋にあいとうマーガレットステーションで開催されている「大秋穫祭」に 2 名の学生が参加し、地元農家の方々の話が聞けました。次年度、当プロジェクトでの出店を企画しており、有益な情報収集ができました。

③ 愛東農業の魅力を探りアピールするための勉強会の実施

平成 28 年 11 月、12 月に、愛東地区での体験学習、大秋穫祭への参加を踏まえて、愛東農業と地域の魅力についての意見交換を大学で 2 回、愛東地区で 1 回実施しました。学生と愛東支所担当者、地域おこし協力隊が意見交換し、何が魅力であり、それをどのようにアピールするかを検討しました。

(2) 儲かる農業経営研究会の設立に向けての取組み

研究会の設立に向け、平成 28 年 11 月 7 日に説明会が行われ、約 30 名の農家や関係者が参加され、淡路教授が、統計分析と夏の学生の農業体験を踏まえて「愛東農業の魅力と将来への期待」と題して講演し、今後の愛東農業の将来像について検討すべきポイントが示されました。

その後、研究会の概要が説明され、意見交換が行われました。意見交換では、将来への不安や研究会への期待などの意見がありました。

(3) 連携強化への取組み

龍谷大学農学部のカリキュラムの中で、地域農業の分析と地域計画に関する講義

および演習の事例として愛東地域を取りあげ、実践的ケーススタディを体系化して実施することにしました。これは、1年次から4年次まで関係科目を通じて愛東地区を対象とした積み上げ式の実践教育の体系構築を目指すものです。

このことを踏まえて、平成29年1月にあいとうマーガレットステーションの藤関氏が農産物直売所と地域農業振興についての講義を瀬田キャンパスで実施しました。

来年度、講義を踏まえた調査実習を愛東地区で行う予定です。この教育体系の構築に向けて、本事業はその土台を形成するものといえます。

(4) 広報活動

本事業での活動の様子を龍谷大学農学部ホームページのブログに逐次掲載しました。また、農学部案内の冊子にも紹介される予定です。

4. 活動成果と次年度の計画（課題）

果樹栽培農家での梨の収穫や選果、販売体験を行い、直売館の状況や地域の情勢を知ることが出来ました。

また、地域おこし協力隊からは、協力隊になった理由や愛東と農業の素晴らしさを聞き、地域農業の発展を考えるうえで大変参考になりました。

そして、夜には、関係者や農家の方々と地域課題についての話し合いの機会をもち、愛東農業の発展の可能性を実感することができました。

以上のように、本年度は、統計資料やレクチャーを通して愛東地域の農業構造を把握し、体験学習や地域の関係者との交流を通して愛東の魅力に迫りました。

次年度は、果樹栽培農家での栽培管理から販売までの農業体験を年間を通して行うとともに、儲かる農業経営研究会において地域の方々と意見交換して、地域の魅力を発揮して「地域全体が儲かる農業」を目標にした取り組みを行います。

具体的には、秋の大秋穫祭における「キッズ・マルシェ」の企画、クリスマスマーケットなど販売が落ち込む冬場の企画、愛東の魅力を体感する農業体験ツアーの企画、地域資源を活用した農村の活性化への提案などを学生からアイデア募集する「(仮称)学生農業経営システムアイデアコンテスト～農村の未来が輝け、チャレンジ!」を行なう予定です。

実際に地域と共に課題解決に取り組むことは、学生にとって農業に関する視野が広がり、地域にとって外部との関わりは活性化には有効と考えます。経験豊富な農家から技術と知恵を学び、大学での学習と合わせて次代を担う子供たちに農業・農村の魅力、愛東の魅力をつないでいきたいと考えています。



写真-1 大学での勉強会



写真-2 梨の収穫体験



写真-3 梨の選果体験



写真-4 梨販売のPOP作り



写真-5 梨の販売体験



写真-6 現地での学習会



写真-7 現地での合宿



写真-8 コンソーシアム発表会

プロジェクト名（活動テーマ）： 東近江市における空家の調査とその活用に向けての提案と実践	
提案者	：東近江市 市長 小椋 正清
自治体担当者	：東近江市 総務部総務課 主幹 栗田 豊一
大学担当者	：びわこ学院大学短期大学部 ライフデザイン学科 教授 谷口 浩志

1. 取組み体制：

市総務課：空家対策の一環として、空家の利活用を推進するため、大学と自治会等との橋渡しの役割を担う。

びわこ学院大学：地域を学ぶ授業の一環として空家の現状調査を行い、所有者（利用者）や地域住民との協働で空家の活用に向けた提案と改修の支援等を行う。

所有者等：活用方法等将来ビジョンを、大学と協力して策定し、地元での受け入れ態勢を整える。

2. 背景・目的：

全国的に空家の増加による地域環境への悪影響が懸念されており、東近江市では昨年度から空家等対策への取組を本格的に開始した。

特定空家等への措置はもとより、空家を地域資源として有効利用する対策が急がれているところであり、本プロジェクトは、その解決策のモデルを提案・実施しようとするものである。

3. 活動内容：

平成 28 年

7 月 26 日 東近江市総務課から学生に向けて本プロジェクトの概要説明。
東近江市の空家の現状や空家等対策推進計画の概要について。

9 月 13 日 東近江市の地勢について学習。
合併後の東近江市のまちづくり政策等について。

20 日 東近江市の政策全般について学習。
自治体としての東近江市の業務と政策推進体制の説明。

27 日 東近江市の歴史や文化に関するワーク。
歴史的事跡や文化の継承に関する事例について個別に調査。

10 月 4 日 「空家等対策の推進に関する特別措置法」の学習。
本法律の主旨や目的と、それを自治体としてどう受け止め活用していくかについての解説等。

11 日 東近江市の空家調査の実態把握と今後の方向性について学習。
これまでの調査結果の概要と、空家に対する対応について説明。

- 18日 社会調査の基礎的事項に関する学習。
- 25日 社会調査の手法の学習とその実践に向けての基礎研修。
現地調査・ヒアリング等にあたっての注意事項を説明。
- 11月 22日 現地調査（市役所の調査に同行）
外部からの調査に関するポイントや、空家の利活用に関する注意事項等について説明。
現時点での東近江市の空家の調査内容や現状について説明。
今後の取り組みについて調整と準備。



空家となった住宅の外観を観察

- 12月 11日 現地でのワーキング（東近江市小田苧町）

対象となる建物は、既にその一部を地域のサロンとして活用されているが、別棟の土蔵が手つかずで放置されているため、これを活用することを目的として、今回のワーキングを行った。

初回は、主屋の2階と土蔵の荷物整理と掃除。

利用し始めてからコツコツと整理を進めておられるが、普段使用しない部分はなかなかかどらない様子である。



平成 29 年

1 月 21 日 現地でのワーキング

午前中は、グループに分かれて建物全体の見学と、現在利用している状況の説明を受ける。



午後は、今後の建物の利用についてワークショップ。



1 月 24 日 前回のワークを振り返り、各自が改めて古民家の活用について、レポートを作成。

1 月 30 日 レポートの整理とデータ化およびブックレットの原稿作成。
ブックレットは、2 月 28 日現在印刷中。

4. 活動成果と次年度の計画（課題）

本講義の目的は、東近江市において政策上の課題を学び、地域の現状と課題を理解することで、自ら主体的に地域政策に参画する基盤を作ることである。

これまで、具体的な課題として空家問題に取り組むための基礎的な知識や社会調査に関する学習を行い、これから行う実践的な取り組みへの基礎的な知識を得ることができた。

今後は、現在使われていない土蔵を素材として、建物の平面図、立面図、展開図などを実測し、それに基づき具体的な利活用や改修等の手法を、グループワーク等を通して決定し、来年度の改修・運営の実践に向けて準備していく。

プロジェクト名（活動テーマ）： 「学生と市民が主体で取り組むナガエツルノゲイトウ等の駆除大作戦」	
提案者	彦根市生活環境課 主任 山本 武
自治体担当者	彦根市生活環境課 主任 山本 武
連携大学担当者	滋賀県立大学 環境科学部 環境生態学科 准教授 野間 直彦 環境政策・計画学科 教授 上河原 献二

1. 取組み体制

- ・環境団体ズ（滋賀県立大学の環境系サークルの集まり）
- ・滋賀県立大学環境科学部
- ・彦根市生活環境課
 - 学生・大学・行政が協同して、研修・研究・事業などを企画・運営し、地域の住民・企業を巻き込んで啓発や活動を実施。大学は、科学的・法的側面の指導をはじめとする支援を行う。学生が主体的に活動できるよう運営に工夫を凝らす。また、この体制で活動を開始するが、参加者の中から参画する組織を増やしていく。



↑ナガエツルノゲイトウ

2. 背景・目的

背景

市内の河川や湖沼、琵琶湖岸などに異常繁茂する、ナガエツルノゲイトウをはじめとする外来水生植物は、大規模な群落を形成し、産業への被害や生態系への影響は計り知れない。対策としては、早期発見・早期駆除が最も重要。



目的

学生が中心となり、市民や行政など様々な主体が連携・協働して駆除活動を実施できる体制を構築し、外来水生植物の駆除を推進する。また、あまり知られていない植物の特性など、周知啓発活動も実施する。こういった、連携・協働こそ、これからのまちづくりの根幹を成すものと考えており、彦根から発信するモデルケースを目指す。

3. 活動内容

★外来水生植物駆除作業の実施

- ・学生が中心となって、市民ボランティアや行政機関等呼びかけ、市内の河川などで実施する。実験として行いよりよい方法を研究する。

★外来水生植物生息調査の実施

- ・外来水生植物の生育・繁茂の状況を、学生が中心となって調査を行なう。

★周知啓発方法の研究

- ・植物の存在自体や干切れても再生する特性など、市民にあまり知られていない現状から、生態や放置すればどうなるのか、駆除の際に注意することなど、市民に対する周知啓発を行なうための手法を研究する。

★ボランティア活動体制の構築

- ・様々な主体が企画・運営する駆除活動の情報を取りまとめて共有し、登録したメンバーがどの活動にでも気軽に参加できるような体制を構築する。

★周知啓発活動の実践

- ・前年度研究した周知啓発の手法を実践し、市民に対して広く知らしめる。

●駆除活動

- ・2016.5.6 ナガエツルノゲイトウ駆除（宇曽川）
- ・2016.5.13 オオカワヂシャ駆除（滋賀県立大学）
- ・2016.5.16 オオバナミズキンバイ駆除（神上沼）
- ・2016.5.18 ナガエツルノゲイトウ駆除（雲川、江面川）
- ・2016.7.26 オオバナミズキンバイ駆除（神上沼）
- ・2016.9.3 ナガエツルノゲイトウ駆除（宇曽川）
- ・2016.9.23 ナガエツルノゲイトウ駆除（宇曽川）
- ・2016.10.26 ナガエツルノゲイトウ駆除（神上沼・湖岸）
- ・2016.11.16 ナガエツルノゲイトウ駆除（宇曽川）
- ・2016.11.19 ナガエツルノゲイトウ駆除（宇曽川）



●生息調査

- ・神上沼での定期的観察（オオバナミズキンバイなど）

●周知啓発活動

- ・広報ひこね 7 月 1 日号「生物多様性」特集記事掲載
- ・ひこねエコフェスタ 2016（11/12、13）にて パネル展示
- ・環境学習出前講座
（小学校、中学校、放課後児童クラブ、自治会など）



●市民ボランティア等への周知

- ・現在は、活動に理解・協力いただいている方へ、彦根市生活環境課からメール配信している。
- ・広報ひこね 7 月 1 日号においても活動へのボランティアを募集。
- ・環境学習出前講座においても告知。

4. 活動成果と次年度の計画（課題）

- ①駆除を継続して実施することで、個体数の減少を推進している。また、小規模のうちに駆除を行うことで、拡大を予防することができる。
- ②学生・市民・大学・行政など、様々な主体が手を携えて実施しており、今後は、この結びつきを強固なものとし、連携・協働することで活動を拡大し、地域の活性化に繋げる。
- ③琵琶湖や河川での現状や課題、植物の生態や特性などを、市民へ周知するとともに、駆除活動などへの市民参画の促進、生物多様性の理解の促進に繋がる。

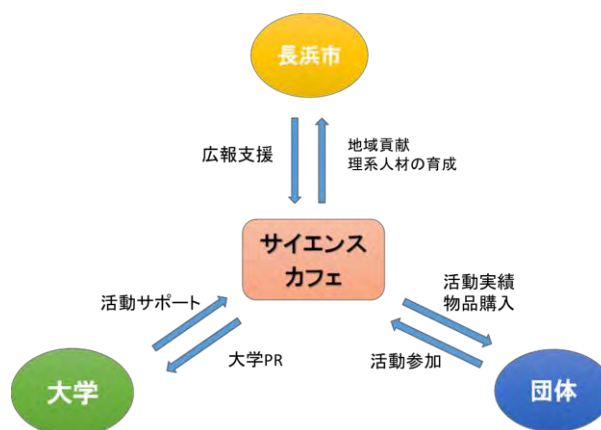
今後は、引き続き駆除活動を行うとともに、市民が参加しやすい環境や体制の構築を目指す。
また、市民への周知・啓発方法を研究し、実践していく。

平成 29 年度計画 外来水生植物駆除作業および生育調査の実施、環境学習出前講座の実施
ボランティア活動体制の構築、周知啓発活動の研究・実践

プロジェクト名（活動テーマ）：理系人材を育てる“サイエンスカフェ”の開催	
提案者	：長浜バイオ大学 学長 三輪 正直
（担当者）	：長浜バイオ大学 サイエンスカフェ代表 町田 樹洋
自治体担当者	：長浜市総合政策部総合政策課課長（兼部次長）米田 幸子 （事務担当：主査 富永 拓）
大学担当者	：学生教育推進機構 学習・就業力支援担当課長 杜下 好恵

1. 取組み体制

サイエンスカフェは、長浜バイオ大学に既存する複数の学生団体が科学を通じて市民と交流する広場である。運営委員会が企画案を作成して各団体間の調整を行い、集団指導体制で事業を推進していく。大学とも連携を取り、町家キャンパスの使用や企画相談を行う。また、長浜市の協力を得て広報活動でのサポートを受けている。



2. 背景・目的

長浜市の地域課題である「理系人材の育成」に貢献するものとして、理系大学である「長浜バイオ大学」の学生が協力して、子どもを含め地域住民の科学に対する興味関心を喚起し、「理系人材の育成」への第一歩としている。

3. 活動内容

サイエンスカフェは、第一回を2015年11月29日、第二回を2016年4月23日に実施した。どちらも好評につき、2016年8月27日に第三回、2016年11月23日に第四回サイエンスカフェを行った。第一回は4団体で実施し、講義形式の実験・活動紹介を行った。第二回も同様に4団体で行った。第一回のアンケートの「もっとたくさんの実験をしたい」という要望をうけ実験数を一つから五つに増やし、多くの科学に触れてもらうことで興味を持ってもらうことを



重きにおいて活動した。

第三回から新たに長浜市の協力が得られ、参加団体も前回より3団体増えた。CELL部、ESサークル、紅茶園芸サークル、動物研究サークル、天文部、グラフィック研究会、町家プロジェクトの7団体で実施した。

CELL部は第二回人気だったスライムづくりを行った。子どもたちはスライムの不思議な感触に興味を示し、原理を説明すると家でも作ってみたいという声があった。大人の方には子どもに説明するよりも専門用語を少し増やしながら説明を行った。

ESサークルは鏡の反射を利用した錯覚実験を行った。ボックスの中に鏡を斜めに差し込みそこに半分に切った物体を鏡につけることで、宙に浮いているようにみえる。子どもたちはどのようにして物体が宙に浮かんでいるのか予想し、仕掛けを見破ると喜んでいました。

紅茶園芸サークルは紅茶・ジュース・クッキー・コーヒーマーケットの提供をした。スタンプラリーの景品にクッキー・ジュースを提供し好評だった。

第三回初参加の動物研究サークルは生き物マップとクイズ、実際に琵琶湖周辺に生息している生き物を持ち込み展示した。マップで生き物の分布を解説し、知っているようで知らない生き物の謎をクイズ形式にして子どもの興味を引き付けていた。同様に初参加の天文部は12星座について解説した。紙芝居を作り、一人一人に星座についてわかりやすく解説した。

グラフィック研究会は第三回のチラシ挿絵を担当し、キーホルダーデザイン及び販売をした。子どもたちから好評でもっと種類を増やしてほしいとの要望を受けた。

町家プロジェクトは事業のサポートをし、受付・広報活動・活動補佐を担当した。



第四回サイエンスカフェはものづくりをメインとする実験を行い、科学を体験してもらった。空気砲、マグヌスコップ、忍者猫、カイロづくりを行い、その場で原理の解説をわかりやすくした。1番人気だった実験は空気砲とスライムづくりだった。ほかの実験も材料が簡単に手に入るものばかりだったので家でも試してみたいという意見があった。今後とも簡単かつ安価な材料で行える実験を行い理系人材の育成に取り組んでいく。

また、前回同様長浜市全域の小中学校・公民館にチラシを配りサイエンスカフェの定着、参加者の確保を行った。

4. 活動成果と次年度の計画（課題）

開催回数を重ねるごとに参加人数が多くなり、第三回のサイエンスカフェでは250人超の親子が参加してくれた。これは第三回サイエンスカフェの広報活動で長浜市の小学校・中学校全校、各学年各組の生徒に一枚一枚チラシを配布した結果だと考えられる。参加した親子からは、学校に配布したチラシを見て興味を持ったなどの意見が寄せられた。

内容も7団体が参加し充実したものとなった。科学実験はもちろん天文部や動物研究サークルのような生き物の生態や星座解説を行うことで様々な角度から科学に興味を持ってもらえるようアプローチをかけた。

アンケート結果では全体の実験・展示に興味を持ってもらえ、以前よりも科学に対して興味がわいたと答えた来場者が80%を越え、他と比べ圧倒的に多かった。また、「将来科学者になりたい」「実験って面白い！」などの声もいただき、科学に対する数居は下がったように考えられる。今後参加したいかというアンケートには「参加したい」と答えた人が全体の約93%であった。

第四回も変わらずの好評で県外からの参加者も15組いた。

今後の活動内容は、広報に関しては宣伝効果の大きかった大々的なチラシ配布をし、実施内容は科学実験の種類を豊富にし、より科学に興味を持ってもらえるよう事業を実施していく。

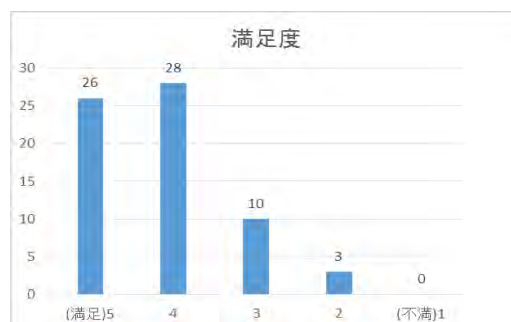
来場者数

第一回サイエンスカフェ	約70人
第二回サイエンスカフェ	約100人
第三回サイエンスカフェ	約250人
第四回サイエンスカフェ	約220人

科学に対する意識変化

以前よりも興味が湧いた	41人
以前と変わらない	1人
つまらない	0人
その他	10人

第4回サイエンスカフェアンケート結果
回答数 52



来場者感想(アンケート)



○大学地域連携課題解決支援事業に採択後に実施した第三回サイエンスカフェから製作し、長浜市の全小中学校に配布したポスター

第3回 長浜バイオ大学 サイエンスカフェ
～家族で楽しむ科学～

CELL部 スライム作り (有料)

ESサークル 無重力!?実験

天文部 星座解説

紅茶・抹茶サークル 本格コーヒや紅茶、ジュース、お菓子提供 (有料)

親子で楽しめる 科学がいろいろ!

動物研究サークル 生物マフス、動物クイズ

長浜バイオ大学 オリジナルキャラクター フララも登場!

<スタンフラリー>
・冷たいジュース
・特製クッキー
どちらかプレゼント!!

月 日: 平成28年8月27日(土)
時 間: 10:30～18:00
場 所: 長浜バイオ大学 町家キャンパス
(滋賀県長浜市元浜町7番5号 JR長浜駅 徒歩4分)

※入場無料、事前申込み不要

サイエンスカフェ運営委員会
sciencecafe.nbio@gmail.com

※この活動は、長浜バイオ大学「地域連携コンソーシアム」(大学地域連携課題解決支援事業 2016)の助成を受けています。

サイエンスカフェ

スタンプ スタンプ スタンプ

ひきかえけん

第四回サイエンスカフェ
～家族で楽しむ科学～

実験テーマ「空気」

空気砲

忍者猫

スライム作り

こだわりの紅茶・コーヒ

サイエンスカフェは長浜バイオ大学が紅茶や科学実験を通して、一息つきながら家族みんなが気軽に科学を楽しめます!ぜひ気軽にお立ちください!

スライム作り・原素結晶 骨格標本展示販売も行っています!

月 日: 平成28年11月23日(水)
時 間: 10:00～16:00
場 所: 長浜バイオ大学 町家キャンパス
(滋賀県長浜市元浜町7番5号 JR長浜駅 徒歩4分)

問い合わせ先: サイエンスカフェ運営委員会
sciencecafe.nbio@gmail.com

※入場無料、事前申込み不要

※スライム作り・骨格標本展示販売は有料です。

第五回 サイエンスカフェ
～親子で楽しむ化学～

サイエンスカフェとは
体験科学実験を通して、
紅茶などで一息つきながら
科学を楽しんでもらおうという
自主活動団体です!!
ぜひ気軽にお立ちください!

実験テーマはっけん
身近な色を発見しよう!

クロマトグラフィー
水だけで
いろいろな色を分ける!!
身近な色を分ける!!

分光器

スライム作り

酸性・アルカリ性?
どちらだろう?

フラスコタリウム

他にも豊富に
設置した遊具に
生きている
生き物の細胞を
いろいろと見るの
でぜひ来てね!

長浜バイオ大学
マスコットキャラクター
フララ

月 日: 平成28年3月12日(日)
時 間: 10:00～16:00
場 所: 長浜バイオ大学 町家キャンパス
(滋賀県長浜市元浜町7番5号 JR長浜駅 徒歩4分)

問い合わせ先: サイエンスカフェ運営委員会
sciencecafe.nbio@gmail.com

※入場無料、事前申込み不要

※スライム作りは有料です。

※この活動は、長浜バイオ大学「地域連携コンソーシアム」(大学地域連携課題解決支援事業 2016)の助成を受けています。

No. 10

プロジェクト名（活動テーマ） びわ湖大津の魅力発信！ステキな動画製作事業	
提案者	：サークルワークス 代表 松井 敬樹
自治体担当者	：大津市 産業観光部 観光振興課 杉本 裕介
大学担当者	：龍谷大学 理工学部 情報メディア学科 岩嶋 浩樹

1. 取組み体制：

「おおつ新発見！」という5分番組を龍谷大学生自身が制作し、ZTV（滋賀県のケーブルTV局）にて放映する。

- * 龍谷大学の役割：学生自身による取材交渉・撮影・編集・納品・アフターフォローの活動全般
- * サークルワークス：実地の撮影・編集等の技術指導の他、構成等のサポート
- * 大津市観光振興課：取材先選定に伴うアドバイザー・取材先の協力要請における学生支援

2. 背景・目的：

昨年の平成 27 年度大学地域連携課題解決支援事業として当動画製作事業が採択され、「大津の魅力 再発見！」という番組を制作、この活動が評価され平成 27 年度活動奨励賞を受賞させていただきました。

今年度は、下記の目的

- （1）龍谷大学生の地域活性化プロジェクト M PROJECT と大津市との連携を図り情報発信等の取り組みを強化することで、より地域密着型に移行すること。
- （2）取材を通じ、龍谷大学生の大津市への見識・知識を深め、より良い産学連携の基礎を築いていくこと。
- （3）この提案する活動を通じて、大津の魅力を、大津市の新規在住者、また滋賀県内の大津市以外の在住者に発信し、大津市内へ足を運ぶきっかけを作ること。
- （4）この活動が継続できる関係を設けることで、龍大生へ大津市内への就職・また在住へと、大津市の将来的な発展に繋げていくこと。

の上記4項目を基に、昨年度事業で取材した大津の知られざる観光スポットを単に紹介することから、観光スポットでの取材対象テーマを「人の熱」にフォーカスをあてることにしました。これは観光スポットの紹介だけでなく、そこに従事する「人」の顔や情熱・想いを紹介することで、人の温もりを含めた人間味のある観光PRを促進、より多くの方に大津の魅力を発信したいと考えました。

インタビューにおいては、そのお人柄、またその方が語るスポットの文化・歴史、そして成り立ちなどの内容をお聞きし、学生にとっても、より多くの知見を広げることとしました。

3. 活動内容：



牛肉サミット 2016：放送日 7 月 10 日～7 月 16 日

毎年 8 月の第 4 週に大津市で開催される食のイベント。県内外から 2 日間で 6 万人以上を集客するイベントの実行員会の会議に密着！イベントがどのように企画され実行委員会のメンバーがどのように運営に携わっているのか等取材しました。



叶匠壽庵 石山寺店：放送日 8 月 14 日～8 月 20 日

大津市の老舗和菓子製造販売店「叶匠壽庵」さんが、新しく石山寺にオープンされた店舗を取材。石山寺の東大門にオープンした由来や、提供される料理（お菓子）、またお店にかけける想いをお聞かせいただきました。



大津祭曳山展示館：放送日 9 月 11 日～9 月 17 日

毎年 10 月に開催される大津三大祭りのひとつ、大津祭り。大津祭りの歴史や曳山、お囃子などが常時見学・体験出来る曳山展示館を取材。時代を超えて先祖代々受け継がれている各町 13 基の曳山の由来や意味、またお囃子の調子の違いなど、深く、濃く教えていただきました。



第3回びわ湖チャリティー100km歩行大会：放送日 10月22日～10月28日

今年で3回目となるびわ湖チャリティー100km歩行大会。

地元の中小企業の経営者による実行員会が毎年10月に開催している歩行大会です。長浜からおごと温泉までの道のりを2日間かけて歩く一大イベントとして成長。今年は約600人近い方がチャレンジされました。この取材では、イベントを始めた由来や想いを実行員会の方々に、また「なぜ過酷な想いをしてまで歩くのか?」「なぜ参加したのか?」などを歩行者に。

そしてゴールのおごと温泉では、感動のゴールを迎えた歩行者の様子も撮影しました。

運営・歩行者からみたイベントの魅力に迫ります。



西教寺：放送日 11月20日～11月26日

大津の中でも、紅葉の隠れた名所として知られる坂本の西教寺。

今年の取材ではこの紅葉をメインの取材となるはずでしたが、ご対応いただいた中島住職のお話は、西教寺の由来、そして歴史や見所などなど、話し出したら止まらないほど様々なお話をくださいました。また明智光秀ゆかりの寺院ということで、明智光秀のお墓や、西教寺を守ったとされる神猿の話など紅葉という切り口ながら、深みのある取材が出来たと思います。



三井寺：放送日：12月18日～24日

様々な有名映画のロケ地として知られる三井寺。この回では女性ならではの楽しみ方をテーマに、お寺の由来から、実際に撮影が行われた場所や甘味処を紹介しました



おおつ近江米カレー 1 「湖舟」 しじみカレー 放送日：1 月 22 日～27 日

石山寺を代表する釜飯であるしじみ釜飯。この釜飯と大津の新名物が融合してできた「おおつ近江米カレー」を取材しました。釜飯の味を最大限に楽しめるカレーは必見です。

今後の予定取材分は以下のとおり

2 月放送分	比良とびあ、びわ湖バレイ
3 月放送分	寿長生の郷

4. 活動成果と次年度の計画（課題）

成果

取材活動や編集を行っている龍谷大学生は、滋賀県以外から通っている学生が多く、昨年同様に大津の見どころを取材することで、より深く大津を知るきっかけになっています。

今年度は大津の見所紹介に、その場に從事する人にフォーカスを当てたことから、より大津が好きな方々の熱というものも感じていることが大きいと感じています。

取材先対取材陣という関係から、大津の魅力を発信する同志という位置づけが出来つつあるのではないかと考えています。

課題

取材先への取材において最終 5 分という枠で収める必要があるが、それぞれ取材先の方の熱意がすごく、5 分の枠に収まりきれない量の素材が多くなっていること・・・

別の発信先（紙媒体・ラジオ）などとも連携できれば映像・紙・媒体と 3 つのクロスメディアでの情報発信なども出来そう。